奥羽

草稿第七篇

下

へ13
1164
59

1164
59

十返舎一九著

和歌山宿北の端より川あり。石利根と云。橋を八丁目橋と
いふ。西の方へ二丁程行て不動院といふ。修験の寺あり。世の人
不動院といふ。是なり大門の額に寺願百石境内一里四方
也。寺領ありしとぞ。
古利根川を添て林あり。日本十六ヶ所の内
修験の頭領。さて法華経八巻の内
うつし日も七ッさがりの内のこせ。

帝国図書館蔵書之印

たゞ蓮いけをとく〳〵ゝ雨の類ふるとあてさんぢの江豆
ある男も婚姻のもいとびそろと歩行が延高へ行のゝ酒う
一えん合長ゆゝれびやいふとゝであるとさあを坐ねびとゝ　ふゝん
たまをびとゝとゝぢとゝぢ切ふいへ西度まをげられゝ多うち
痛をのう〳〵鶴羅房の生醉をかゝふけられべ今ハ一長も歩び
きびゝ小測の村津〳〵ゝ屋ゝうと居ゝ小八一又て那先をきとえ
ね〳〵人ゝ狂歌師も他合ねあんまり人ゝきあひと知ゝ
強〳〵厭物ゝゝ〳〵ゝ林次さんせあてゝおめゝでもかまて行ゝう

いゝれふゝうゝんな生醉をおつ河て余りいゝ飲ゝてゝ
おゝうね〳〵ゝコレサゝ林次さんゝゝ世のとうゝれねゝのゝとゝゝゝ

「ちら」「ぐだ」てあんちごく「や」「ア」てあんぐ又人の着ッさまく
かぢりついて落きさぬ。あらく仰ごうわとうう人がうるやうぐ。
ドモウ一トかさ出ちうぐうとこなのトせおびうこいきをふるつていそばがたの関宿九八美方ゑれたるかをちのあひなを美ち逆ッ
まちまあ乗ち「ヤア」徒羅房わぐれうぐこなぐやレたうぐねぐく
ぐぐうう「大ぐ義ぐぎうアもねぐ」ぐんぐ金俵この人八先せの
字ぬ
必着ぢやうぬ。ぐれぐこんなを酔ッとうッて死人同前を
ぬうてあ人を打捨て先ぬ。ぬくこうア余り人情を知らぬく
というぐんぢやうア有やせんう。ぬうもうく腰ぐぐ痛ぐうらぬく

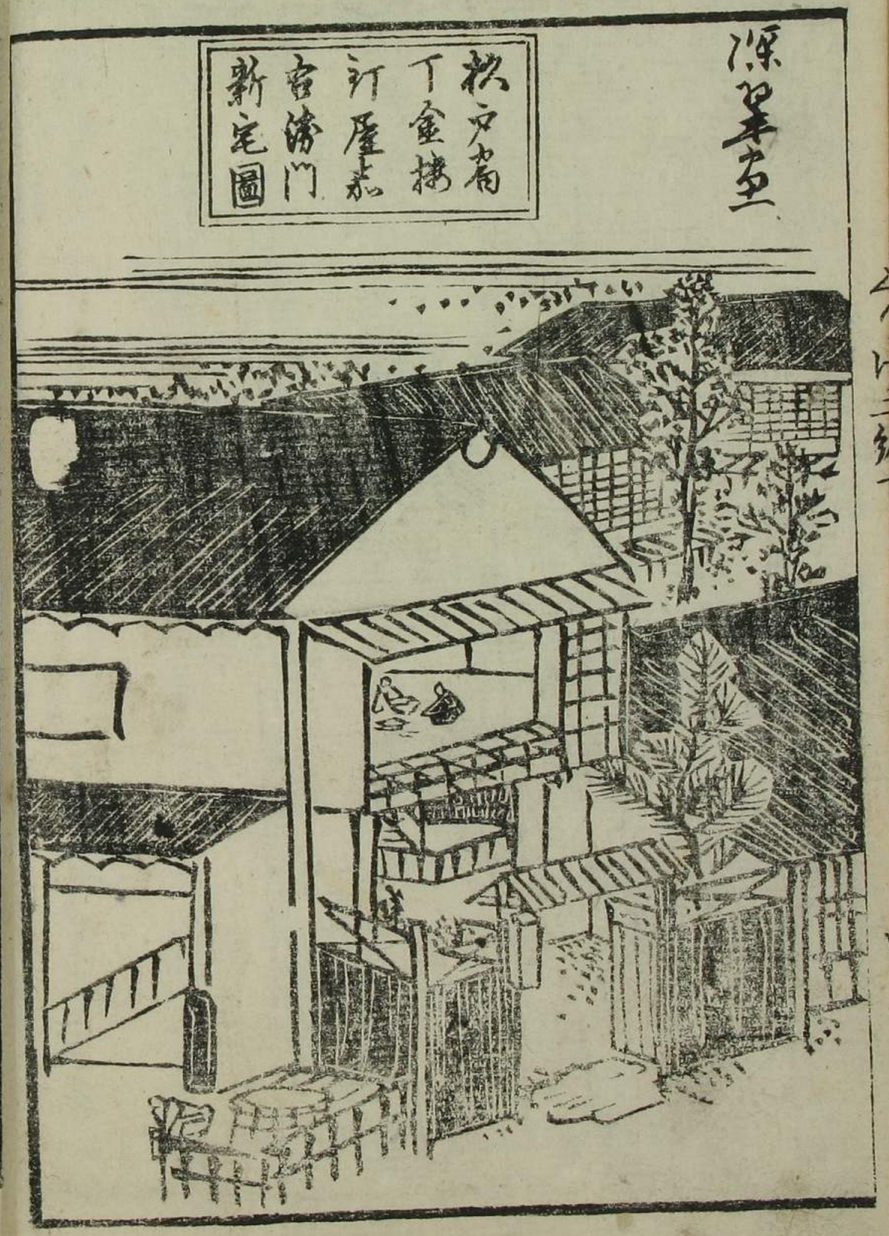
イぐくモウちつと辛抱さろ。今を打戸の行屋く
いつそッ先刻のきくでおれが招提をおごつて出ぬ「そ
いつかありぐてくそんなうモウ「下肩」ぐぎうモウ旦那向の
豆場小鯖奥の名物ぐござりまう。やつとまうたのうん
とこなトせおびうこいきをふるつていそばがたの関宿九八美方ゑれたるかをちのあひなを美ち逆ッ「モウ」満落ぐ出るやうぢやうア大丈夫ざる
「ヤうぐ」さんおめくもうくさうぐぎけ「ア」ちらア
先刻うう直ッとのぐ。痛くうぐそうねくとうぐ者の「下肩」
物ねぐぢやうアうねくう。作病をかまくておとのぐ「ヤ」「テッ」

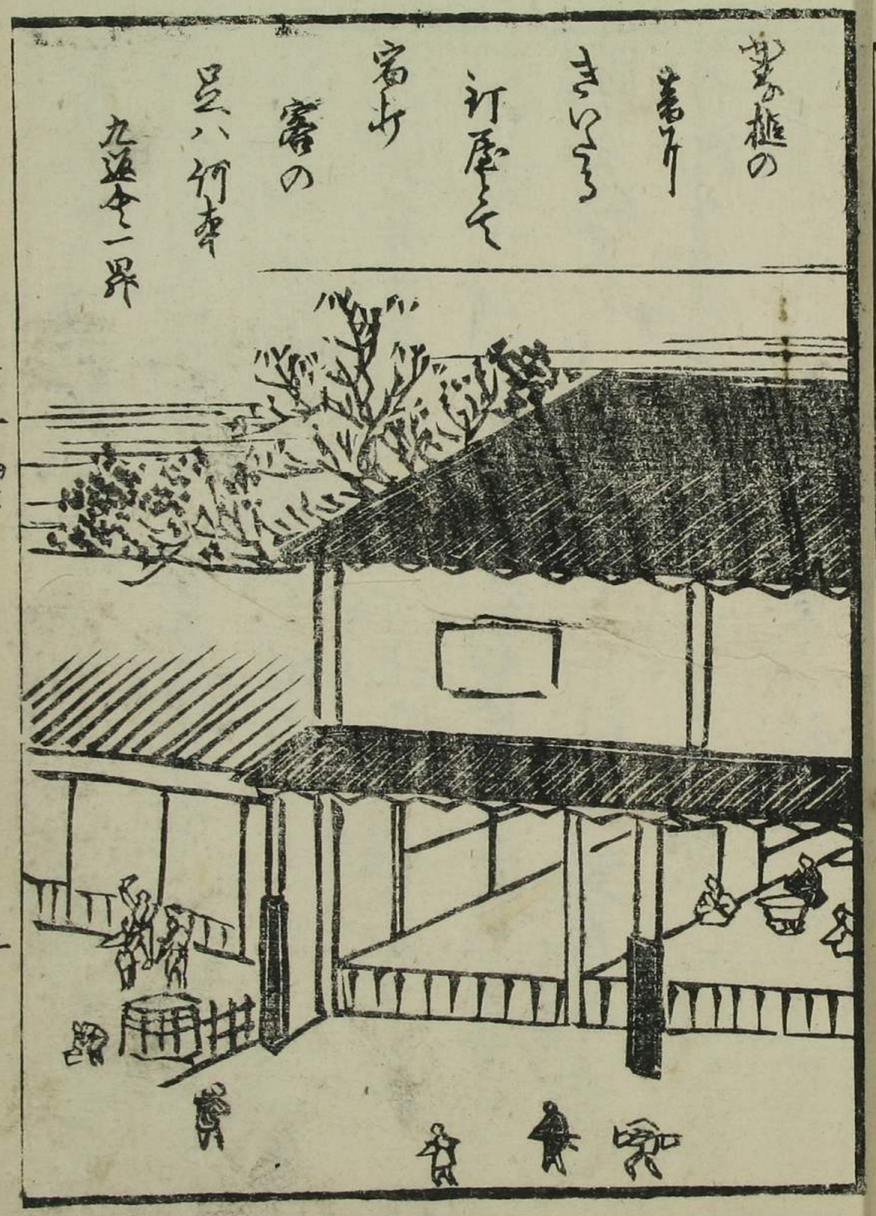
いめくまいわかあるこ　「イハ」「何もかも後の一真ごう」「一ト月」
ちらつ〳〵ゆきあぶらどん。どうら貴様の見屋がむだ〳〵そうな。
その内に吾がかつぎやせうや「ヘン」「面ごい花魁の二朱ちがて異張屋」
十五匁ばかりのめごせろくおちめかつぎなせ「トちらこうこうこう」「ヱイ」
ぐるあくとせるぐとあきやう「ヤア」「いろの間ぬ酔ぐ酔めさら」
もやうら先刻ら酔いせるのふよるやそひの例せつくりそ
ゆハかおでれ愛くと先はぐ結婚文さうか「あどけ」
ぢやいうら初ろのくト「ヨどんぐあかあさこう」

よしく今ぶぞうまろろ入るぐい「どうせるもいうるい」
うらぶ肛辺所切かつてかぐ人ぐアモシのうちと屋へよう
ねうひで福まる屋くるう祝で花のるつてれ屋へうぐ
ねぐ幸抱のうしやを「ハ」「もうくこんるめか食こるかねこんる
孫さんがうりのぐ早くく移戸へ為て宮庄の内へいつて
酒りてく「ヱ」「ちまくく」「ハ」「十三この頃市川屋と家ろと番さ
といふんるぐうこサ「ヱ」「ナンそんるこうちやうねく何ろ
子細ぐあるぐらうちるさねくうく「ハ」「十二まうく

深草五

秋戸者
丁金拂
江屋忠
宮清門
新宅圖





遅ての母サ参ッ「かぐ〳〵提灯さ〳〵「此方さ〳〵
「そう責られちゃッたるさかやッたら迎ッ三別義でも
孤へ市川屋の女房へ極楽〳〵といふのぢかッ「コヤ押
の強い亭主の孤へ相撲下女でせへ横かぢりをふらう
といふのぢ「ヨヤそんな先をかりしさるをしてまッ例ふ
泊てんなせへ「どうしてく行屋へ出度兵庫ふ
普請ぢ出来て會席を始るといふのでき間梅溪さん
のに論でちらぢ親方の十返舎ぢ報隆を書さうら何でも

見ていうねへちゃッ親ろへ迎へ「そんぢゃことでふ見ね
まへるりまけりへモ「ヨッいめまのサ〳〵那里でも
いくら早くいろ〳〵ト是より四人ばかり男ていそぐ
わどふ本ッ提根二本本郷五会久の村をうち
過ぎ名ぐも杉戸宿ある行屋本陣番頭のりて来ふ
けるッ「よろしお出なされまさお早い方附でどざりまー〳〵さ
女房「お洗足の湯女ッ来うあげぬうコレようおのでどざりまさ
お脚絆いてとく〳〵お置なされまー只今那ふまそくせまし

話「アイそれいかお世話でござりまして申さいまして江戸でございまして申さいまして江戸でございまして申さいまして江戸でござい

でおもくが此頃中病気でそれも急度書まと一所ふ
めつてやせん。爾及の膝栗毛も四編立編こつけて出た
書肆の所へのところへ大きに出来ますと　女房「それで
嘸れ難渋さぬでございませう」「今坂路ばかりして
志摩屋憲ぐ水線　女房「ヲホヽヽ」おかるのおにさま「奢歌
あの男のう　亥三「聞るしあのざゝ時おかるさんまりあるな
指櫛を買はとうのてやんなせ」「青八一ばくでのおうちの
金席を踏るべく那ひ及」「おつちつと好ある河内屋の

お助とのうてやつてやんなせ」　女房「お助様さぬでござりまして
「ヤ初ておのも知らぬ新でおあるか」亥三「此奴見くる
るを見て出てきさる」　女房「かしこまりました」
アヤまとりてはこのひさまアまうやはもかさまうやはもかさまうやはもかさ

てゐさ「サア一ツあげやせう」「ヲヤよく入れたり」客「客をとろかうと、客の喜こんできるぞれ物淋しい」亭「どるこもよう〳〵ッしやすと先刻〳〵有ごさうのうち客さの内ぞ」

ござりまス皆さんお湯をめしまんろ」「先生」

籠屋さんお湯ごうざね。吉原かまぐモうちつと酒ごーくこ

ねくちゃア遠入ねく」「已そんごさうは遠入イく座へ」「已

も間をふらく遊〳〵」「サア入ッしやのます」婢「吉ごつれかまうう

「ごりくいつるお茶達ごりつちゃア花ろちるぽ客人お茶一ツ

おわごんなせ〳〵酒ぞ女中元でも呼でお二人ずトゝ」客「吾

コレおふさうさあさお湯」「出来門ッ」亭「へいく」客「サアく

異かう酒ごまそらせやせうトゝ」客「モシ親方お御馳の

おまを際風ふいてやるこ門のお沢ござ

那子達ふも飯も食せうトゝ」「何のやごかう饅頭を喜ぶ歩

むくん会門へお異なせ〳〵」亭「ホントトまりまトゝ」客「

のあうひまそうなぎバ」「ヤア強てきこ平を御ごさコウ」おめくごこ

大ぶ〳〵ていれ」

高てアなえ一ツ入鶴卵ごぞ菜ホれん盛〳〵ポ平尾屋の入ら

魚ごど元ポ個〳〵鮮濃汁ポ入ポ本の芋のこの客の客を盛〳〵

浮世「すきくいたりしゆる」「江戸で鳴町の座敷で八人向
童箱」「緞羅紗」を仕込と童奥庭の大和国で二重風呂へ入レ。
奥原の伊勢で蘭長箱」入レこの大平のうぎを遠
ねへ」「きをり遠ねどうぞ」「のぎこちめくお乳をのま
せうめ」「アヽまけちとこの屋くのとこ」「きまあ」お
三弦がある浮ねへ」「音がひくかろお釜さん踊まあ」
「ハヽヲヽ踊ゞ」「ちてまち奏図」「おけさ」おけさ入るとて
蔭で図とうのうとかくおけさ是図の毒ごとぱりやがさや

来ことよでこねよで面りげさ」「ひよで唐ゝうが居よおりやおう
やう」「そこでそう」「質曲て女郎買おまりで
酒呑別会でるあらぱちくやでう」「そこの屋ゝ仮ぬ不郎
なのをいくそ」「この」「是言ちくらを唐ようもてやへ」「十二」「ほひきん
契結をよのんで世ゝたたれ」「ゝ」「ゝ」「ゝ

せ〳〵「わぜとう」「わぜこいつて先生が中なれぬのうぐつ
偶婦の出る客のわさまを繁昌結び二百兎とり申ノ二人で
武百さそれるも結あげ〳〵「この宿でなるのぐつ
ます〳〵「ア〳〵さうかね。吾ア川落のうで屋泊こ附こ人で
三百取られこの代ゐれ申こ「どうも間ゐるのだりいつ
男ぐで「それでもり柳ゐ三人ゐ三百ゐくも結あと申
といひあ「モウいらこだまつてゐるさ」とのうち「サアどゐ
ゐらいこませう「ドラく吾ア桑ぐろう先陣こ「うと

まりまし「トかこをモシどゐこもゐ梯ぐゐ「ア且那のおぐ〜ゐ
こゐゐゐアどうゐさいまこ「イヤこんゐ泥ゐ「ゐ「コレく梳の
歯もゐのこの通り「とどこく「サアどゐこ「先は出こ
出発ゐせ〳〵「おれこ「ゐ「ア「ゐりませうゐ「ア〳〵此且那の
お願ゐこのへんく「モシ角能でもおとんゐもつこ「イヤもまかこ
いく〳〵今日精壁の庄屋こで江戸の帰りゐと角能ぐきて
村の義兵ゐうちまくこれこいふ評判でぐり申こ「よりこい
ませゐもあれぐゐるめゐ「「ウン」「北出といふ奴ぐ二番頭て

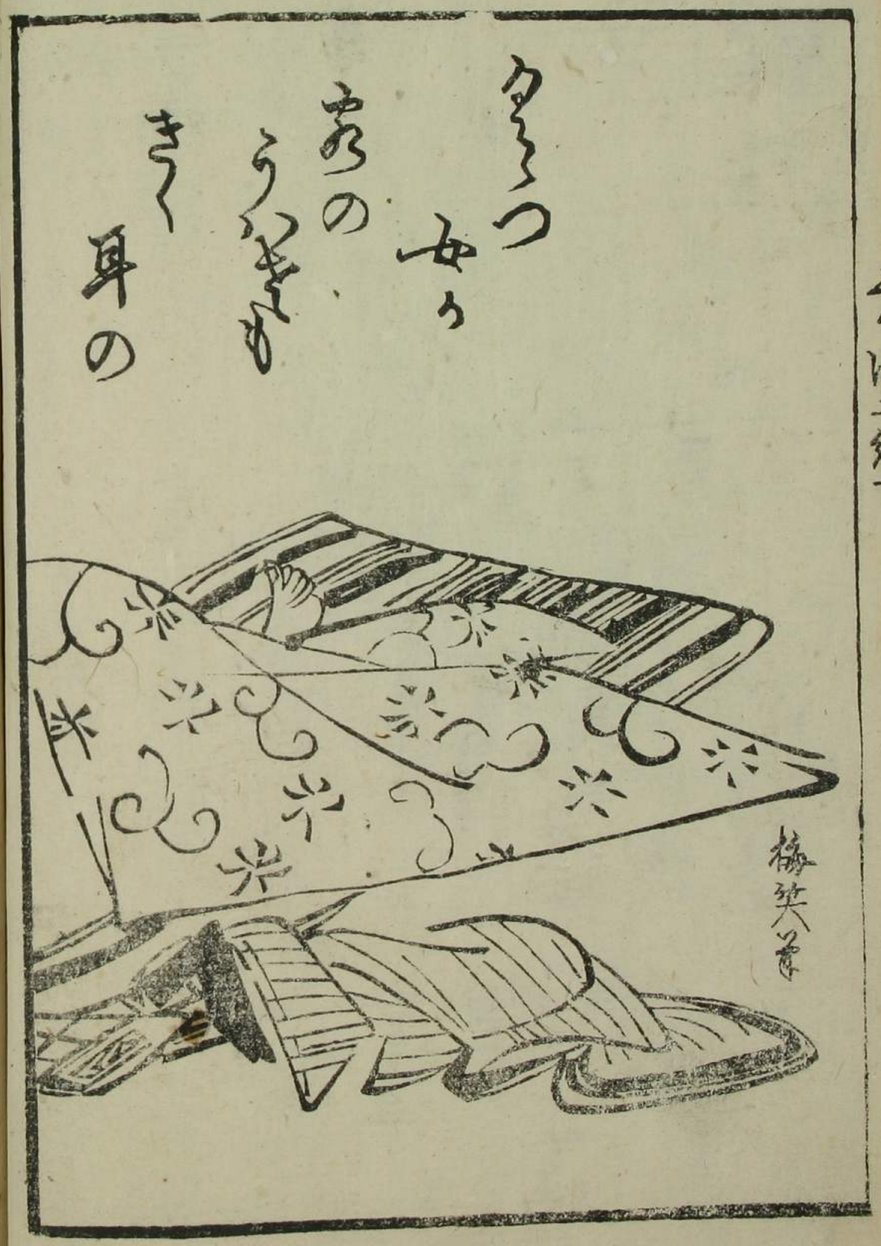
千年山といふ年老る奴が一番でいきつのて前歯と二枚折
うのことをいつてござる衆。イケ面よりさるヱ。モシ
お髭でござる衆ちとはてお長なさるねと物の髭が
剃やせん。寸白物へ残しやせう。それでもなんざら
唐人のやうで見ッともないの。ちとはを剃て剃て貰ひ
なせへな。待ふのと大将をゑんさやうでをうのいる。直
ちよいとでござり申ス。ハア且那も前歯をもしつとろ
式ホイ是いまをりはを明日抱子ゑ入歯と呑込ざ。これより延ちち
らざらもそう

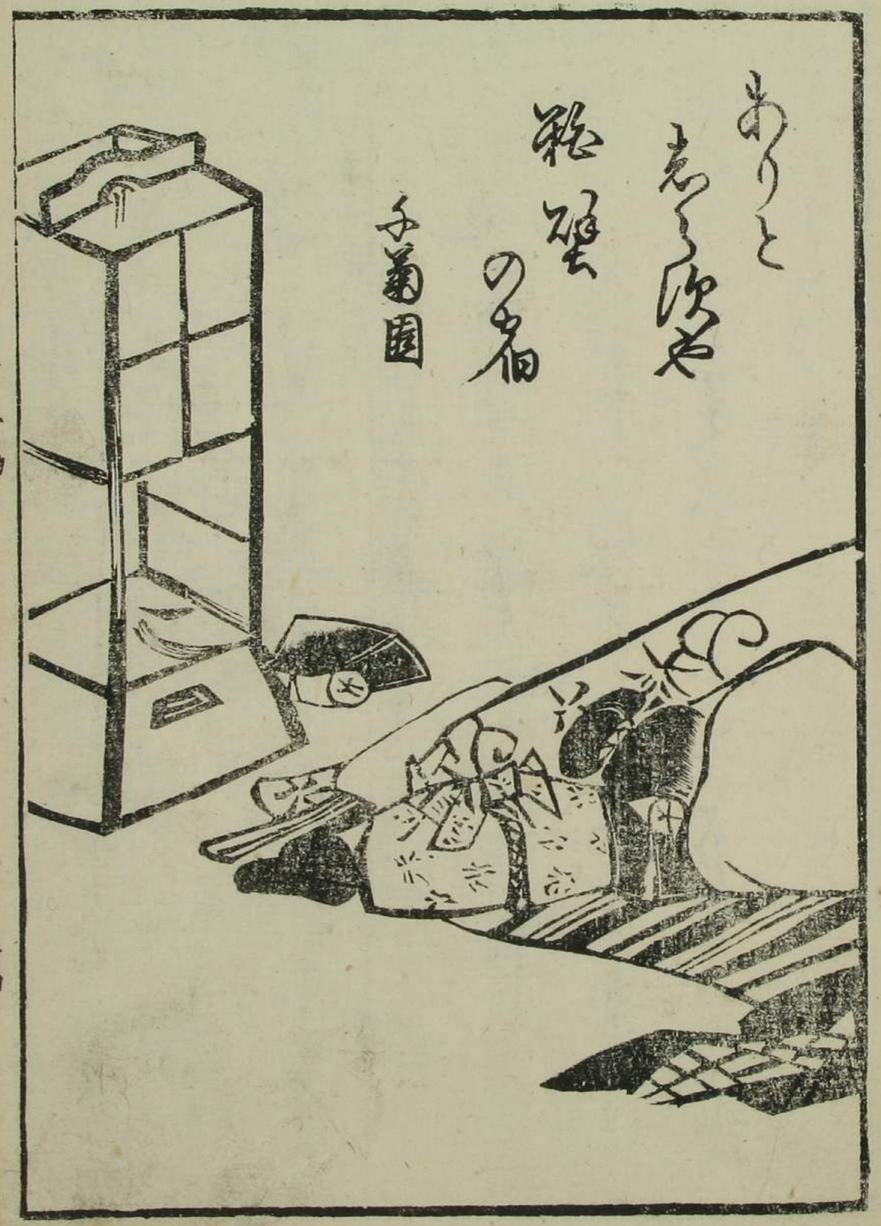
ありまひまること天酒とあり。それかそれ。ねで
こつはいやハのとかりざーきるく。ゑやつあんでそんるゑひぞ
るざうこ。ゑるこび毎ゑ宮床屋。うッちよハせて座もきや
アざーそでそう順屋くうるゑッてゑんさくでもねへ。めんまり
馬鹿ふーねりんざ。おくらゑ偽ゑ。ゑんねでゑん八無傷
ざう平他ざうゑ八ーいりんざう八公三傷五他女月水のもこ。ちざうゑいひゑんし
お前さんハ去年の九月ちちと来ゑんくそのちと
いふりのゑう光御ゑ別仮ゑ又屋へ出てもさまでの右帯
どんゑ云俗ゑさのんでも来てらんゑんくるゑあっくうね

おめくさんざつて五ひよこ須賀村で丹五きゐとつてけくふ
知まとゐんくこゝ方さゐざつふ抱のたゝ野屋ひとゝゐの丹五それ文
ゐうひまくゐ屋九月末さつあうでゐ衆さつけばふ
ふとんぐねせこつ五ヲ かゐ迴状が出んねでゐ紙の毒九月
中旬までハ宿中一体ふとんのこと丹五
品成まりると衆兵をゐばたり
こんる流を初ふとんざ時ちゐ来つ丹五こが成こう人をざう
湯水のやうふ流くこつでふとんも折てねせこがな今ちゐつ
えつとんざつふ五布ぶとんまつひちげてコレゐ衆ばいきざゐいく

いちやかたゐんの言ふ入りこゐ宿ふハ 丹五
五布ぶとんハ二ツ折ゆとゐ書ふゐこと

コレ
ひざいく接てこれぶとゐて行ゐんくいんざらゐがくうのて
ゐ抜 出のゐくこまびたりくなぶら ヲ
ヲそふ時こんゐくも一箇ち 丹五
ヲ金ちうるせくうう遅出
てゐちこ一ハン金ち遅出すくいくこうう 丹五
ヲ上のちやつあるゐくくハ ヲ時ふ丹五さん大きゐることだ
ありひとちかくこが明ハつくくうのう 丹五 長ゐる大文まで
まづ鰻鱺屋のふゐがきゐるうつゐ 紙ハようゐ鱺をうゐして
ひとけばはゐうゐきだりゐ三五


ゆうつ
あの
うつくしき
耳の
梅笑人

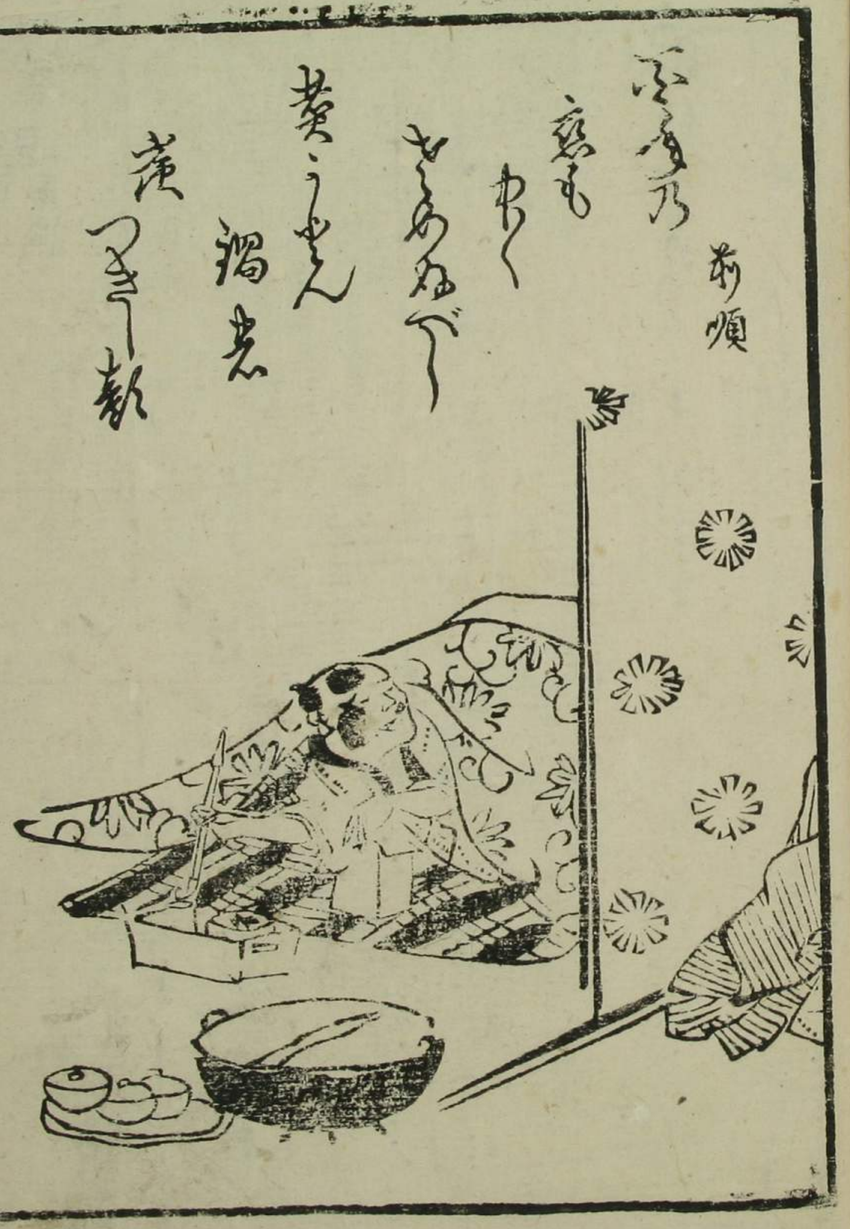

ありと
あらゆる
物語
の名
千菊園

二寸余二ツ程ホツリとして入てあるこれいかのうるさきの話
夜が明るの中まを次のまま寝ちまをしてかいそりと
「こりゃまあまあどうご那女の物であろうこと」「ナニ」「どうもぎ対らつてこりゃまあ
大ちがうぎさ死めど上書を書まれこ時こ生をこけと
又て対をかけてきちをちまくぶくてけ対を入習さよ
ちげくねぇ。ぞるんやろつまろねく理屈ぬ南鮮
のちくだりも詰あめくぶ仕出うこのぶ今ぶ示ぶ痛ッ
てるうねく話「今更面癖をいつこぶてもあくこぶ茶代
とうすらうと思ッて上方者の南鮮と異ひつこもうんな

方法を思ふうぶ何をうこのといつて饗待ぶ南
鮮の出ーを仕ぶやがて出を呑くいれこ移ら
かうこのいねく「それふつけてもし紙ぶどうるぶこらう
と若旁であうねく話「まあくもれふ方夏まるをておくぶ
いつとあんんまきさて「ちつと呑くして出ーをんやせうと
いふうふ示ハ「やり「こりつけうこのつくく法師ハトぶんのうれ
ーふをそて「ナニ「ナニぶくれのをそんるふ考くのぶをうーく
をこも話二「ナニぶくれのをそんるふ考くのぶをうーく
もねく話八「異ぶをうーくねくりのぶうくつくく話二

子菊堂

梅矢竹



この紙和めぐろうしやかろこ屋「紙和ごろう養所多人
ごろうねぐがごろうもをしくそこへられぬアハハ
いわところへ「おわさるでごりまいろコレハいろることあるこの
寿喜きこう「ヤアおあ新しく鍋墨ゲ屋へつきまるとトそれて話を早
ホンこまらこの通りこチョウいわくまるコレ私多八よく
養所重人と寄こまらこなひ牡丹屋「モシ出主人ゴント
那新ごりのう笑いびあアねられやせんまエ亭主「出た
イヤまやとんこお新ホンこえまい昇くお洗ひなのこの

「コレおちんヨかねごろこのホンお鍋を持てこの
「のでお新「墨ゲ付ましこらうパアゲりまこ
鍋皿の鍋をお持るのされこな「アノ拾漂めく鍋皿ゲ食こくと
ぬうこ食こ直おきこえそるくなまやアゲつこ其鍋ゲ邪ア
ごりこ今うきこ皿の中ここのサ亭主「それでごのまゲ茶鍋皿
○鍋おきこ入でごのまゲうこ鍋墨ごりけでるりまこぬ
「そのやちろも新こあゲ亭主「時ホを近ホ四方めうけの上に
ゲごこりまゲ出入ハ出ハ宿のホ座婦の物持の女隠居でごごり

まんが年八五拾一二で女へ抱大そ宮のおさとといふ女よこでい
でこのまんが田地田畑いろ〳〵ものなんぜ有金ぐ九二三千も有とりメ
つゆ其源きくをふへ是へ先守上六ヒ方のの高ら勤金ぐく
抱こゝとりつゆで月々弐百宛の外ふ金子鰻鱔鯰魚のたの
其食へ通ひで取て毎日物をとるとりつゆぐりろ江戸の
お方をと教んでゆてまるこぐろ〳〵かつりをとりゆ其多八
さるがいりぐかとそんでまん必へそのつへ上にどうぐ洗とのんで
ぐざいまん一元ぐ八ゆり吉ぐ方ぐ向ませりぐ喜ぐ「まつぐり

ひとりとも出美の方ぐよきそうをぐんでまん此源知ぐ金
吸百ぐあんえふを酒ぐどうぐ喜ぐ「猪撫でぐざりまん必「それがありぐ
とのぐひりでもよをちうでぐ喜ぐ「そんあうぐ
そんをちうつ中のまし私ぐ此業門ぐとまん必「そんあうぐ
どうぐでをこのとりまん必ぐ洗をさん洗てきあんぜ「酒撫
なるこ酒ぐをうをあきつ〳〵ト必へやとのあるつをとりをられてうのをを
をふうをきにいるををとと必へ「こ洗をさん金ぐ氣のきうぬく面の
こうをうけて喜ぐくと喜ぐる
海安ぐどくうぐくぐてきと喜ぐ「お氣の毒をとりくるまのこと

注二「ナニサけしさるハ畢定」時ふそういをとゞ乳ふいら
ねゝ」「どこもかも結乳くて乳ほるいおうとを
ゐあちぎってゐます」「こゞが私」「内をゆスあいうまい鼻
ぶひくろう用ふ合まのいとそれで叶でござりまし」「そ
ゐやゆ虚ぶゝ」注三「モシ鼻の一伸おうのひ立支ゞとぎ
ゐたゞ度昔をつれてゐ」「おうんをせく急度乳ふ入
ゐうまりてんせゐたゞう」亭「イヨくあなこのお鼻も頭
ふんむゞうゝ」「ゞ」注三「ハテそとふ立支ゞ有ゐたゞ」「ゐんとで

亭「畢を注文通りふうまきくゆ付鼻でうまくゆり
ゐた」亭「是ハ口頭向く」「幸せん刻つきぬきの口ゞえん
ふを書ひまりてござりまた」「それでお鼻を十ぶんふ
お造をもってゞ度いうまく口相演のとのふゆうふ
いくゝうござりまた」注三「お乳ぶくなきれまた」「一番
ゐてお目ふ穂また」「ナニ鼻を造てまい伝ゐう者ゞ
二寸ふでもこ寸ふでもこせゐた」注三「ニてめゝゞ三寸なう
おれゞ五寸ふ造へ」「お前ゞ五寸ゐうふゐう者ゐた」亭「ハテ

扨これハ国ゝの其ゝ事ゝの巣を造る程ゝ事ゝ

の国ゝごゝりませぬ。先ゝ此度ハ浮世形年増さまの

此番でごゝりまゝト畢竟国子をとりよせさせまゝ

巣をそ造ける

作者曰 これより浮世形年増遊巣をして男やうけ不申くゝごゝりハ

第三編のもちぬ紀しるもぎをする義向をまゝけつゝひてお板

いゝハ

奥羽一覧道中膝栗毛第二編巻之下畢

五十